

エレジー

父の夢は舞う

清水邦夫



エレジー

父の夢は舞う

清水邦夫

河出書房新社

エレジー — 父の夢は舞う —

昭和五十八年十月十五日 初版印刷
昭和五十八年十月二十五日 初版発行

著 者 清水邦夫

装幀者 黒川淳子

発行者 清水 勝

発行所 株式会社河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二

電話 編集〇三―四〇四―八六一一

営業〇三―四〇四―二二〇一

振替口座(東京)〇一〇八〇二

印刷 暁印刷

製本 中西製本

©1983 KUNIO SHIMIZU

定価はカバー・帯に表示してあります

エレジー

——父の夢は舞う——

登場人物

吉村平吉（六十九歳）

吉村右太（六十三歳）

中平敏子（四十八歳）

河崎清二（二十九歳）

塩子（三十二歳）

夜の道。

男、現われる。

吉村平吉、六十九歳。

と、踏切りの警報が聞えてくる。

平吉、足を止めて待つ。

別の人影、現われる。

平吉の弟、右太、六十三歳。

右太、兄を見て、

右太 どうしたの？ おにちゃん。

平吉 ……

右太、そのままいこうとする。

平吉、あわてて止める。

右太 なんだよ。

平吉 ひかれないのか。

右太 ひかれない？

平吉 鳴ってるだろう、踏切り……

右太 どこに？ え、どこに踏切りがあるんだよ。

平吉 バカ！

電車の通過音……

踏切りの警報音、消える……

平吉 もういい。

平吉、歩き出す。

右太、茫然と立っている。

平吉（ふりむいて）もういいといってるだろう。

右太 おにいちゃん……

平吉、かまわず夜の闇へ消えていく。

夜の空気が変わった……

右太、客席へむきなおる。

右太 いやあ、あの晩には驚きました。踏切りなんてどこにもないんですから。てつきり兄貴の頭がへんになったのかと思いました。なにせ一人息子の草平を亡くしたばかりでしたから……とにかくこのままじゃ氣持が落ちつかない、そこであわてて兄貴を追いかけて、強引にビールをのみに誘いました……

闇にビヤホールのテーブルが見えてくる。

平吉、ポツンとジョッキを手になっている。

右太、トイレからのもどろといった感じで、明りのなかへ入っていく。

右太 ねえ、さっきのあれだけど。

平吉 ……

右太 いやね、トイレでやつぱり気になっちゃって……なんだい、あれ。

平吉 あれって。

右太 踏切りだよ。

平吉 ……

右太 あそこ、曲ったところに踏切りでもあると思ったの？ それともなにか、もし
かして……

と、つまみに手をのばす。

平吉 (その手をたたく) 洗ったのか。

右太 洗ったよ。

平吉 濡れてない。

右太 よくふいたからだだよ。

平吉 よくふいても、多少の湿気はのこるもんだ。

右太 しつこいよ、ふいたよ。そんなことより踏切り。

平吉 しつこいのはお前の方だ。

右太 でもさ。

平吉 遊びだよ、遊び。

右太 遊び?!

平吉 昔よくやったらう、あったつもりで何々やるっての。

右太 あったつもり?

平吉 そう、あったつもり。

右太 じゃ踏切りがあったつもりで……どこが面白いの、あれ。

平吉 どこがって……立ち止るだらう。

右太 それで。

平吉 人間、たまには立ち止るのもいいだろう、とくにお前なんかそうだ、かつこばかりつけやがって、こせこせこせこせ、まるでたれ流しみたいに生きている。

右太 またはじまった、おにちゃんはね……

平吉 人前ではやめろといったろ、おにいちゃんは。

右太 そういうけどね、あんたはずっとおにいちゃんって顔をしてんだよ、おれの前で、六十年間……

平吉 そういうお前は、ずっと弟って顔してやがる、情けないね。お前がいつまでもおにいちゃん、おにいちゃんってポチみたいにくっついてくるからあんなバカな遊びを思いつくんだ。

右太 おれのせいだっていうの。

平吉 お前と一緒にだつて子どもにもどつてしまふ。みつともないつたらありやしない。

右太 こっちだつて同じだ、夜中に踏切りゴッコ……

平吉 人にいうな。

右太 何を。

平吉 踏切りゴッコ。

右太 人にいえないよ、そんなこと。

平吉、テーブルから立つ。

右太 もう帰るの？ あのだ、例のお金、来月には少し返せると思うよ。

平吉 来月？

右太 ま、なにかの拍子で再来月になるかもしれないけど。

平吉 じゃ当分だめだ。

右太 そりゃないだろう、わかつてるよ、そっちだって困ってるのは重々わかつてる。
必ずなんとかするよ。

平吉、去っていく。

右太 近いうちにいくから。

右太、ゆっくり客席へ視線をもどす。

右太 ……わたしはあの時、兄貴の話をまるまる信じたわけじゃありません。遊び、あったつもり、踏切りゴッコ……どことなく嘘っぽい、あれはやっぱり兄貴の幻覚だったんじゃないのか……。年齢をとってくると、いろんな体の変調がおきる、ありもしない音が聞えてきたり、ふしぎなものが眼にちらついたりする、どっちかといえればそれが普通になってくる。現にわたしなど、夜寝ていると水の音がひっきりなしに聞え

てきたりします。蛇口から流しっぱなしになっているような水音、起きてしらべてみると蛇口はきちんとしまっている……兄貴より六つ年下のわたしがこうですから、あちらになにかが起きても驚くことはない。そりゃまあ、踏切りの音つてのはちょっと変っていますが……でも、わたしはこう考えたわけです。兄貴の場合、踏切りの音が聞えてきても、それをつ切るわけじゃない、突っ切るようだそりゃ危険だ。しかし立ち止ってじっとおとなしく待つだけ、だから、ま、心配ないんじゃないか……

闇のなかに、

晩夏の斜光がさしこむ。

その光りのなかに、色彩あざやかな大きな鬼颯が浮ぶ。

右太 ……さて、そろそろあの日のことをお伝えしなくてはなりません。いささかオーバーにいえば、あの日から兄貴の生活にふしぎな光りがさしこむようになりました。まるでおこぼれを味うようにわたしの生活にもちょっぴり……あの日、夏の終り、わたしはたまたま兄貴の家におりました。台所の戸がこわれている、その修繕です。八年前に買った家なのに、あちこち傷んで、そりゃひどいものです。兄貴は工業高校

の教師をしてたんですが、こういうことにはまるで無頓着でほったらかし、もっとも教えていた学科は生物でしたが……そんなわけでわたしが時々やってきて、あれこれ面倒を見るわけです……

平吉の家。

その書斎兼居間が見えてくる。

晩夏の斜光のなかに浮んでいた鬼胤はその壁に飾られてあったものだった……

（二応間取りの感じを説明しておこう。下手は玄関へ通じ、正面は小さな庭に通じるガラス戸があり、上手奥は寝室に使っている部屋に通じ、上手は台所、さらには勝手口に通じる）